南多摩4市と多摩大学、京王観光㈱の産学官連携による「多摩地域マイクロツーリズムコンテスト」が開幕!!

学生発の「マイクロツーリズム」企画を多摩観光の新定番に!!

自宅から1～2時間の近場で密を避けて行う「マイクロツーリズム」。このコロナ禍で提唱されたあらたな旅のスタイルが、地域の魅力の再発見につながるとして注目されている。こうしたなか、南多摩地域では昨年度、多摩市と稲城市、多摩大学、京王観光㈱が「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」を立ち上げ、地域の大学生からマイクロツーリズムのアイデアを募るコンテストを開催。今年度からあらたに八王子市と日野市も加わり、プロジェクトはさらなる盛り上がりをみせているという。さっそく、このプロジェクトの取材を通して、マイクロツーリズムによる多摩の観光振興の可能性を探ってみたい。

「東京多摩」は東京都における5割以上の工業出荷額を誇るとともに、首都圏から好アクセスでありながら豊かな自然あふれる魅力的な地域だ。本コーナーでは毎号、東京多摩・離島地区の商工会を取りまとめる東京都商工会連合会とタッグを組み、同会長・副会長、本誌編集長が各市町村の商工会を訪ね、円卓会議を開催。地域資源の発掘や課題の掘り起し、まちづくりや地域連携の動きなどを議論してきた。

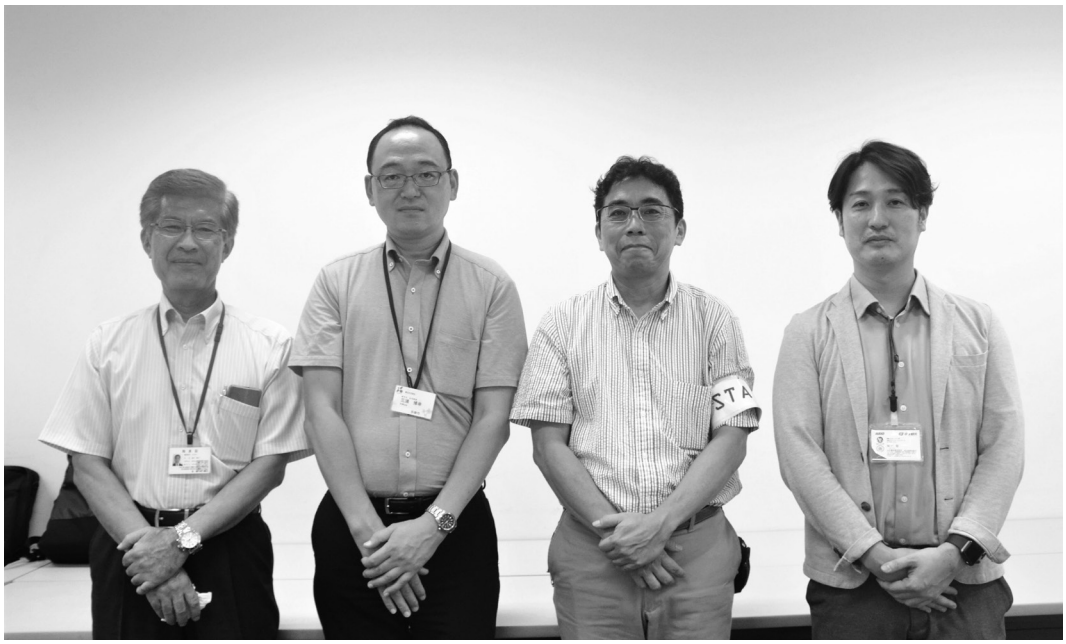
「多摩地域マイクロツーリズムコンテスト」1次審査会、学生たちによるプレゼンテーションの様子

学生ならではの個性的なツアー企画案がタップリ

2022年7月9日（土）、第2回「多摩地域マイクロツーリズムコンテスト（タマリズム）」の1次審査会が城山体験学習館（東京都稲城市）で行われた。このコンテストは、学生たちから多摩地域における観光まちづくりに向けたマイクロツーリズム企画を広く募るもので、当日は多摩地域にキャンパスのある10大学（16チーム）から45名の学生たちが集結、イロイロなアイデアがプレゼンされた。

あるチームは「東京フルーツランド！日野で季節のフルーツ頬張りツアー」と題する企画を発表。日野市内の農園でのフルーツ収穫体験、規格外フルーツを使った「フルーツバーベキュー」や「フルーツピザづくり」などで地元特産品の魅力を堪能し、SNS映えする写真もゲット、さらに廃棄フルーツやフルーツの皮などでTシャツを染める「フルーツ染め」体験を通してSDGsやエコについて考える、というまさに学生ならではのフレッシュなアイデアがテンコ盛りという感じのツアーだ。また「パークスポーツ@小山内裏公園」というユニークなアイデアを発表したチームも。これは八王子市と町田市にまたがる広大な小山内裏公園を舞台にパラリンピック正式種目の球技「ボッチャ」や人とイヌが一緒に楽しむフリスビー競技「イヌティメットフリスビー」など〝ゆるスポーツ〟を行おうという企画。これらの「多世代が気軽にできるスポーツ」を楽しむイベントを開催し、関連遊具も常備して公園を訪れる高齢者や小さい子どものいるファミリーが交流し、健康増進にもつながるのではないか、と学生たちはプレゼンしていた。が、こう

多摩地域マイクロツーリズムプロジェクトは、その立ち上げのための補助金申請に向けた書類作成からコンテスト応募者向けの事前説明会、コンテスト当日の現場の仕切りなど、すべて多摩大学のながしまゼミの学生たちが主導、それを行政がサポートした



右から京王観光戦略プロモーション室地域コミュニケーションチームの城戸聡氏、多摩大学経営情報学部の長島剛教授、多摩市市民経済部経済観光課観光担当課長の三浦博幸氏、稲城市産業文化スポーツ部観光課長の藤田勝彦氏

した取り組みも継続するための収益性を確保できるかどうかが難しい。審査員たちもそのあたりを指摘、学生たちに伝えていた。このほかのアイデアとしては、最新のARアプリと地域の循環バスを活用した観光振興策や団地住民などを対象に防災体験を通じて地域コミュニティ活性化をはかるといった企画や八王子市内のパワースポット巡り、滝行、座禅、厄払いなどの体験を取り入れたツアーなど、企画案はいずれも個性的なものばかりだった。

産学官連携によって アイデアの事業化を目指す

この1次審査を通過したチームは活動支援金（最高10万円）を受け取り、これをもとに11月までの「実証実験期間」にモニターツアーやアンケート調査などを行って企画をブラッシュアップしていくことになる。そして専門家によるプレゼンテーション講習などを経て、12月の最終審査会に臨むという。

だが、実はタマリズムはその後からが本番。コンテストの企画を担う多摩大学経営情報学部の長島剛教授によれば「最終審査会は『ドラフト会議』とも呼ばれ、たんに最優秀賞を決定するだけでなく、プロジェクトに参加する自治体や企業が『協業を期待できるチーム』に対し投票を行う」そうだ。もちろん、このドラフトで期待値が高かった企画は次年度の事業化を目指す。「やるからには、ぜひ学生発のアイデアを事業化、収益化し、多摩ならではのマイクロツーリズムとして定番化させたい」と長島教授。プロジェクトの事務局を務める京王観光㈱戦略プロモーション室地域コミュニケーションチームの城戸聡氏も「そもそもこのプロジェクトは、コロナ禍による観光産業の低迷への強い危機感からはじまった。たんなる一過性のイベントとして終わらせるのではなく、産学官でシッカリ連携して継続的な取り組みとしていきたい」と意気込んでいる。

はたして今年はどんな企画がドラフト会議で事業化に向けて動き出すことになるだろうか。その前哨戦ともいえる1次審査を終え、「今年の企画には地域の魅力をシッカリ掘り下げたものが多かったので、実証実験期間にどうブラッシュアップされるかが楽しみ」（三浦博幸氏・多摩市市民経済部経済観光課観光担当課長）、「参加自治体が4市となったことで昨年にも増して多様な企画が出てきたと思う。自治体同士のヨコ連携も深めながら、たがいの地域の魅力を協力して発信していきたい」（藤田勝彦氏・稲城市産業文化スポーツ部観光課長）と、行政側の手応えは十分。月刊『コロンブス』でも引きつづき、このプロジェクトの進捗をウォッチしていく。多摩地域に魅力的なマイクロツーリズムがつぎつぎと生まれていくことを期待したい。

多摩マイクロツーリズムコンテスト タマリズム

主催：多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会
（多摩市・稲城市・八王子市・日野市・多摩大学総合研究所・京王観光㈱）
後援：公益財団法人東京観光財団・東京都商工会連合会多摩観光推進協議会
幹事市：多摩市
事務局：多摩大学総合研究所・京王観光㈱
企画：多摩大学 ながしまゼミ
tamarism.com

「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」とは、コロナ禍の長期化により、観光・宿泊業はじめ地域経済が大きな影響を受けていることを踏まえ、地元の魅力を再発見するなど、継続性のある地域活性化を目指して官民学連携で実施する、都内初のプロジェクト。次世代を担う大学生などにより構成されるチームを対象に、郊外住宅地を有する都市における課題を踏まえたマイクロツーリズムの企画を公募、自治体・観光協会・地元事業者と連携しながら事業構築をし、次年度以降の実用化を目指す「多摩地域マイクロツーリズムコンテスト（タマリズム）」を開催。